

秀賞

つながる思い

秋田県五城目町立五城目第一中学校

2年 齊藤 慶紀

今年の夏休み。とても暑い夏だった。7月15日に突然、その恐怖はやってきた。

僕はその日の昼、学校の宿題をして、おやつに冷えたスイカを食べた。とても甘くて美味しかったのを覚えている。父と母が前の日から、秋田県に線状降水帯が発生するというニュースを気にしていたのを覚えている。テレビで九州や四国、中国地方で土砂崩れなどの映像も見ていたので、なんとなく不安ではあったが、父が「25年間ここに住んでいるが、水路があふれて道路に足首まで水がきたことはあるが、洪水になったことはなかった。」と言っていたので、そんなに心配はしていなかった。雨も土砂降りというほどではなかったから。

しかし、3時頃家の周りの道路や駐車場に茶色い水が流れ込み始めた。「車に水が入ると動かなくなってしまう。」と父が言い、車を高い場所へ移動しに行った。何となく僕も怖くなってきた。5時になると、家は濁った水に囲まれた。外を眺めると、腰の高さまで水に浸かって歩いている人が遠くに見えた。6時過ぎ、ついに水は玄関から侵入し、どんどん家の中を水浸しにした。あっという間に停電し、暗い中を家族で2階に避難した。どこまで水が上がってくるのか見当もつかず、眠れない夜を過ごした。朝になると水は引いていたが、家の中は泥だらけになっていた。

そこから大変な毎日が始まった。水がでない。浄水場が浸水被害を受け、五城目町のほぼ全域が断水となったのだ。顔も洗えない。歯も磨けない。トイレも使えず、ご飯も食べられない。もちろん、お風呂にも入れない。もう勉強どころではなく、朝から晩まで連日、家の片付けと掃除の繰り返しとなった。

翌日、秋田市に住んでいる祖父母が、高圧洗浄機を持ってきてくれて、お風呂にためていた水を使って泥を洗い流し、水分をブロアーという道具を使って吹き飛ばしてくれた。僕も家具を運び出したり、機械を使った作業を手伝ったり、自分ができることを頑張った。運び出しても運び出しても終わらず、洗っても洗っても終わりが見えなかった。本当に疲れた。特に、暑いのに入浴できないのが苦痛だった。それでも、父が毎晩作業が終わると僕と母を遠くの温泉施設に連れて行ってってくれた。水が出て、お風呂には好きな時間に入れた毎日がいかに幸せなことかと思った。

町役場に行くと支援物資が届いていると聞き、タオルや手袋などをもらった。

それは全国の人たちの支援だと知った。とてもありがたく感じた。人の温かさを思った。しかし、僕はその後自分の心をもっと大きく動かす出来事に出会ったのだ。

4日くらい過ぎた頃、ボランティアの団体が全国から五城目町に来てくれた。東京から来た大学生の人たちには、駐車場にたまった泥を掻き出すのを助けてもらった。水路にたまった泥は、県内のボランティアさんに手伝ってもらい、床下の泥は、栃木県の遍照寺というお寺の僧侶の方が率いるボランティアの人たちに手伝っていただき、きれいにしてもらった。その中には、熊本県人吉市から来た人がいた。遠くから来てくれたことに驚いた。僕にその人は「3年前の大水害で被災して、自分が助けてもらったので、恩返しの気持ちで活動しています。」と話した。大雨の後は、30度を超える暑い毎日が続いた。そんな中での作業は、大人でも大変なことだ。それなのにこの人は、とても爽やかな笑顔で話したのだ。何だかとても感動した。人としての大きさを感じた。

その後、停電や断水が復旧し、少しずつ普段の生活に戻ることができた。

五城目町で起きた大雨被害。僕は被災して大変な夏を過ごした。しかし、だからこそ、いろいろなことを考えさせられた。全国から集まったボランティアの人たちの温かさ。全国から届いた物資への感謝。普段以上に助け合い、支え合った町内の方々。僕と両親だけだったら心細かったと思う。みんなで乗り越えようと思う気持ちが、猛暑の中での復旧作業へのエネルギーとなった。「自分が助けてもらったから恩返しの気持ちで」。熊本県人吉市の方の言葉が忘れられない。人を思う気持ちを何よりも大切にしていきたい。この夏に僕が感じたことだ。ずっと遠い未来になっても、忘れずにいたい。